

「シャンプーを忘れちゃった」

と話す帰り道の男の子のと父親は、まるで、買い物帰りの普通の親子のようである。しかし、その実はチームで日用品を万引きした帰り道の、親子の会話だった。

是枝裕和が監督を務めた映画「万引き家族」が、21年ぶりに第71回カンヌ国際映画賞で最高賞である、パルム・ドールを受賞した。

映画の中で描かれる6人家族は、生きるために、日雇い労働をして、風俗で働いて、万引きをして、車上荒らしをする。

普通の家族は「お金で繋がっている」が、お金のないこの家族は「絆で繋がっている」という内容が作中で語られる。お金もなく、血のつながりも薄いこの家族を通して、「人と人との繋がり」をこの映画で、監督は克明に描く。

映画を観ていると、どうしても、自分の家族のことに思いを馳せてしまう。

ぼくは、父親が銀行員、母親が教師という、嘘みたくに真面目な家庭に育った。父母は二人とも働き者で、家庭を顧みるタイプではなかった。朝が早く、帰りが遅いために、平日は父母と顔を合わせられないということもざらにあった。

ぼくは寂しかったのだろうか。ぼくには弟が一人いるが、親が帰らない、ぼくと弟だけのマンションで、ぼくは弟をこき使い、暴君のように弟をいじめてしまっていた。

ばらばらの人生を歩んでるみんなが無理やり束ねられたような、ぼくの4人家族は気楽なところもあるけれど、ふと、悲しくなることもある。だから、「万引き家族」で描かれる家族の絆に、ぼくは憧れも持ってしまう。

物語は終盤になるにつれ、絆だけで繋がる家族の形にだんだんと陰りが見えてくる。家族が壊れていくにつれ、浮き出てくる「現実」に虚しさややるせなさを感じてしまう。心がだんだんと冷たくなっていく。もう、家族にはなれないことに気づく登場人物たちの絶望感にあてられて、ぼくは少しえずいてしまう。

今持っている、絆。これから作っていく、絆。もしかしたら、持っていない絆。「万引き家族」は、それぞれが、それぞれの絆について深く考えられる作品だ。とかく人との触れ合いが薄くなりがちな現代を生きる人たちに、強く、勧められる作品である。